

玉泉館旧蔵考古資料：近年の再整理を経ての資料紹介

谷澤， 亜里
九州大学総合研究博物館

岩永， 省三
九州大学総合研究博物館

<https://doi.org/10.15017/4377886>

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告． 18, pp.51-63, 2021-03-31. 九州大学総合研究博物館
バージョン：
権利関係：

玉泉館旧蔵考古資料

——近年の再整理を経ての資料紹介——

谷澤 亜里・岩永 省三

九州大学総合研究博物館：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

要旨：九州大学総合研究博物館には、旧制福岡高等学校歴史地理資料室「玉泉館」旧蔵の考古資料コレクションが収蔵されている。本コレクションは、旧制福岡高等学校教授玉泉大梁が学生たちと共に収集した資料や、大井ウメ、中山平次郎をはじめとする様々な人物からの寄贈資料からなる。2015年以降に行った資料の再整理の結果、当コレクションには戦前に収集された学史的に重要な考古資料が多数収蔵されていることが改めて認識された。この点をふまえ、本稿では、当コレクションの概要と主要な資料を報告する。

キーワード：玉泉館、玉泉大梁、考古資料、データベース

はじめに

総合研究博物館では、2015年度以降、玉泉館旧蔵考古資料の再整理を進め、展示への活用も行ってきた。本稿では、玉泉館資料が当館に収蔵された経緯を振り返り、再整理の結果をふまえたうえでコレクションの概要を紹介するとともに、展示への活用状況を報告したい。

コレクションの来歴

本コレクションは、旧制福岡高等学校教授の玉泉大梁

〔1886－1971〕が、実物資料を重視する歴史・地理教育のために収集した資料を基礎とする。1930年には、文部省より予算を得てこれらを収蔵する資料室を建造し、その名にちなんで「玉泉館（ぎょくせんかん）」と呼ばれた。玉泉館設置の経緯は玉泉（1966, 1972）で語られており、秀村（1966, 2017）などでも旧制福岡高等学校時代の様子を知ることができる。

戦後は、新制大学制度の施行と玉泉の退官により、1949年に九州大学第一分校（後の教養部）へと移管された。その後しばらくはめったに開館されない状態となっていたが（『九州大学新聞』1955.9.25）、1960年代後半からは学生への開放も行われるようになった（西尾 1968）。



写真1 玉泉館の外観（左）と内部の様子（右）（福岡高等学校創立十周年考古資料絵葉書）

その後、六本松地区での校舎増築のため1987年に取り壊されるに至り、資料は六本松図書館に移転された。移転の経緯と六本松図書館での収蔵状況については、小林(1988)、九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座(1996)に詳しくまとめられている。

六本松キャンパスから伊都キャンパスへの直接移転が決定した2006年、玉泉館の考古資料コレクションは総合研究博物館へと移管され、2008年に箱崎地区での収蔵先が確保できたのに伴い資料の移転が行われた¹。当初は箱崎地区の第一分館(旧工学部機械工学科知能機械実習工場)に収蔵されたが、2015年の第一分館の解体を経て、現在は旧工学部本館地階に収蔵している。

資料再整理の経緯

本コレクションの資料は、玉泉館時代に遺物番号が割り振られて本体へ注記され、番号、品目、発見地、発見年月日等を記した遺物カードの作成が行われている。その後、六本松図書館への移転に際し、資料の実態が把握されるとともに、写真撮影と新たな様式での遺物カードの作成が行われた(小林 1988)。六本松図書館への移転後は、大学院比較社会文化研究科²基層構造講座により、出土地ごとにまとめた資料目録の作成と縄文時代の土器・石器資料の紹介が行われた(九大基層構造講座 1996, 1997)。

総合研究博物館では、キャンパス移転により移動が生じた標本・資料の所在と保管情報を把握しなおし、データベースとして資料情報を公開する取り組みを進めている。当館へと移管された玉泉館考古資料についてもその対象となったが、これに際し、資料の実態と収蔵場所の再把握、写真と遺物カードのデジタル画像化といった作業の必要性が認識された。そこで、当館の米元史織を中心に、技術職員であった田金美沙、古田英彦、惣門みつ子と、考古学・人類学専攻の学生諸氏の協力も得て2015～2017年に作業を行った。なお、作業に関わった学生は、中井歩(比較社会文化学府)、福永将大・梶原慎司・富田啓貴・梶佐古幸謙(地球社会統合科学府)、原梓・三浦萌(人文科学府)、連景伊・中野瑞香・武下智美・牧野朱莉・岩田英信・長谷川桃子・山下理呂・藤尾徳馬・田中利沙・内田千種・亀川微香・足達悠紀(文学部人文学科)

である(所属は当時)。

その後、2018年に伊都図書館から新中央図書館へ旧六本松図書館関連資料が移転された際、玉泉館関係の事務資料がまとめて発見され、博物館へ移管された。このなかには、2008年の移転時には一部の資料に添えられた状態であった玉泉館時代の遺物カードが多数含まれていた。2019年には当館で特別展示「よりぬき玉泉館」を行ったが、その準備を行う過程で必要に応じてこれらのカードを参照し、情報の更新を行った。

なお、以上のような経緯をたどった本コレクションであるが、六本松図書館から当館への移転は岩永、2015～2017年の再整理は米元、2019年の展示準備に伴う情報の更新は谷澤が担当した。また、本稿の以下の章は谷澤が執筆したものに岩永が助言と補筆を行った。

コレクションの構成

現在、玉泉館資料として5216件が総合研究博物館のデータベースに登録されている。これらのうち、2016年に新たに番号を付された518点を除いた4698点を、カードの「購入・寄贈・採取」欄の記載ごとに集計し、点数の多い人物・機関を表1に抽出した。最も多いのは玉泉大梁だが、コレクション全体のなかでは2割に満たず、これに匹敵する数の資料が大井ウメ、中山平次郎から寄贈されている。大井ウメは旧制福岡高等学校へ漢籍等795冊を寄贈しており、その旧蔵者は夫である大井七郎〔1868-没年不明〕であることが明らかとなっている(山根 2011)。考古資料も同様に七郎の収集によるとみられ



写真2 玉泉大梁教授

表1 玉泉館資料の旧蔵者

購入・寄贈・採取	点数
玉泉大梁	637
大井ウメ	580
中山平次郎	438
田中清吉	172
鏡山 猛	121
玉泉・浅井教授	121
東京帝大理学部人類学教室	100
その他	1551
不明	978

表2 玉泉館資料の発見地

出土地	点数
北海道	8
東北	58
関東	361
中部	33
近畿	75
中国	175
九州・沖縄	2120
海外	166
不明	1702

る。中山平次郎〔1871-1956〕は、福岡医科大学（現在の九州大学医学部）の初代病理学教室教授で、大正から昭和にかけての九州の考古学研究を牽引した人物である。

残りの資料の多くは、数点～数十点程度の単位で寄贈されたものが占めている。玉泉館資料全体での寄贈者の数は、個人・機関を合せて約250に及ぶ。このなかには、氏名とともに「文一丙」「文二甲」「理一甲」など、旧制高校のクラス名とみられる記載がなされたものがあり、遺物の収集・整理に学生たちが関わっていた（玉泉 1966, 1972）ことの証左といえよう。後に九州大学考古学研究室初代教授となる鏡山猛、二代目教授となる岡崎敬の名前も確認することができる。また、「秋吉校長」「白川教授」「牧川教授」など、旧制福岡高等学校教員とみられる人物からも資料の寄贈を受けている。

さらに、大曲美太郎や坂口至といった在野の考古学者や、木下讚太郎、岡為造、河井田政吉といった郷土史家など様々な人物を寄贈者のなかに認めることができる。

続いて、カードに記載された発見地の概要を表2に示した。九州・沖縄の資料が突出するが、なかでも福岡県内のものが圧倒的に多く、玉泉と学生たちや中山平次郎が福岡県内の遺跡を中心に資料の収集活動を行ってきたことや、その他の寄贈者も福岡県内在住者が多いことが反映されていると考えられる。

主要資料の概要

本コレクションを構成する資料の内容は多岐に渡り、時期的にも縄文時代から近・現代に及ぶ。考古資料の多くは表採資料とみられ、カードに記載の「発見地」を現在知られる遺跡名と照合するのが困難なものも多数含まれる。ここでは、時期ごとにまとまった量の遺物がみられる遺跡を挙げつつ、特筆すべき資料や、本コレクション

ンを特徴づける資料を紹介していきたい。

(1) 縄文時代

発見地が九州の縄文土器として、福岡県山林貝塚、上八村貝塚（現在の鐘崎貝塚）、木月貝塚、大分県江又貝塚（現在の横尾貝塚）、長崎県有喜貝塚、熊本県西平貝塚、鹿児島県指宿村（現在の橋牟礼川遺跡か）、出水貝塚の資料が報告済である（九大基層構造講座 1996）。また、このほかに福岡県下楠田貝塚（現在の二川貝塚）の縄文土器も確認できる。

本州以東では、青森県羽黒平遺跡、岩手県長者屋敷遺跡、茨城県福田・椎塚両貝塚、平貝塚、小文間村貝塚（現在の中妻貝塚）、東京都下沼部貝塚、千葉県加曾利貝塚、神奈川県高田貝塚、石川県鹿島郡東湊村大字万行字須崎（現在の万行遺跡か）などの発見地をみることができ、縄文土器の破片資料が中心となる。

また、打製石鏃を中心に打製石器も多数収蔵されており、発見地が九州のものは詳細が報告済である（九大基層構造講座 1997）。打製石鏃は、大井ウメ寄贈の鳥取県、岩手県の資料も多い。

(2) 弥生時代

玉泉と中山の採集による資料が多く確認でき、具体的には、福岡県御床松原遺跡、今山遺跡、今津遺跡、藤崎・西新町遺跡、須玖岡本遺跡、永岡西方台地遺跡、岩崎遺跡、長崎県カラカミ遺跡などの資料がみられる。このほか、福岡県立屋敷遺跡（田中幸夫、渡辺賢彦寄贈）、大阪府安満遺跡（有光教一寄贈）、奈良県唐古遺跡（飯田松次郎寄贈）などの資料も認められる。以上の遺跡の資料は、数量的には弥生土器片が多い。このほか、多数収蔵されている「三潞郡三潞村大字高三潞字東畑」の打製石器は、遺物自体の特徴から時期を特定するのは困難だが、発見地が現在の高三潞遺跡群に相当し、現在判明している遺跡の性格から弥生時代のものとして推定される（九大基層構造講座 1997）。以上のほかにも、弥生時代資料のなかにはいくつか特筆すべき資料が含まれるため、以下で紹介したい。

岩崎遺跡出土炭化米 中山平次郎が『考古学雑誌』第17巻第1号「焼米を出土せる竈穴址」（中山 1923）に報告した、福岡県八女市岩崎出土の炭化米である。中山の大きな業績の一つとして、「先史原始両時代中間期間」すな

わち後に弥生時代と呼ばれる時代を実質的に設定したことが挙げられるが(中山 1917),本遺跡出土の炭化米は、弥生時代に稲作が行われていたと考えられるようになる過程で重要な役割を果たした。中山が本遺跡で収集した炭化米は、東京大学考古学列品室、福岡市博物館、岩戸山歴史資料館などにも収蔵されており(設楽ほか 2015),当館所蔵の故岡部養逸氏旧蔵資料にも中山採集の当遺跡出土の炭化米が含まれる(岩永 2008)。

今津貝塚・今山遺跡出土石斧未成品 中山平次郎のもう一つの大きな業績として、福岡県福岡市西区今津貝塚・今山遺跡にて玄武岩製石斧の「製造所」跡を発見して製作工程を復元し、弥生時代における石器の生産・流通研究の端緒を開いたことが挙げられる(中山 1916, 1924, 1925a, 1931)。この研究に用いられた今津貝塚・今山遺跡出土の石斧未成品はいくつかの機関に収蔵されているが、玉泉館資料にもまとまった量が存在し、その一部は宮本(2015)で報告されている。また、中山からの寄贈品のほかに、玉泉の採集品、「考古学研究会」³からの寄贈品も確認できる。今山系石斧の生産・流通に関する議論は、分業や交換という観点から、弥生時代の社会像を描くにあたり重要な役割を果たしてきた。近年では、地球科学的分析を用いて今山系石斧に用いられた石材の原産地同定が進められており、玉泉館資料の石斧未成品も分析サンプルに供されている(田尻ほか 2013)。

永岡西方台地遺跡出土土器 中山平次郎が『考古学雑誌』第11号第2巻「大甕を発見せる古代遺跡(二)」に報告した、弥生時代中期の丹塗磨研土器である(中山 1920)。玉泉館資料には、脚付鉢(写真3-1)、脚付壺(写真3-2)、袋状口縁壺(写真3-3)が1点ずつ存在し、これらは『彌生式土器聚成図録』にも実測図が掲載されている(森本・小林編 1938:T39, T145, T147)。これらの土器はその後改めて高倉洋彰により紹介されており、弥生時代中期後半の墓地での祭祀に伴う土器の良好な資料として評価されている(高倉 1979)。

栗山遺跡出土貝輪 中山平次郎が『考古学雑誌』第15巻第4号「筑前朝倉郡福田村平塚字栗山新発掘の甕棺内遺物」に報告した福岡県甘木市栗山遺跡出土のイモガイ製貝輪で、1925年2月に発見された石蓋単棺の甕棺墓から合計22点が出土したうちの1点にあたる(写真3-4)(中山 1925b)。なお、本資料は六本松移転作業時のカードでは遺跡名が「東山」となっており、今回の再整理で玉

泉館時代のカードに遡って確認したことで、当該資料であることを認識した。

須玖岡本遺跡出土品 「玉泉・浅井教授」の採集資料と、須玖岡本遺跡の土地所有者であった久我辰實(島田 1930)の寄贈資料が存在し、後者のなかに細形銅剣と小型仿製鏡が含まれる。細形銅剣(写真3-5)は、朝鮮半島での製品と同型式だが、半島製か列島製かの判断は難しい。また、本銅剣について自然科学的分析を実施したところ、金属組織のあり方から銅-錫-鉛の合金化が不十分であり、溶解時に坩堝内の温度が十分に上がらなかった技術的拙劣さの結果と考えられた(岩永ほか 2011)。小型仿製鏡(写真3-6)は内行花文鏡系で約1/4を欠損する。中山(1928)に写真が、高倉(1972)に実測図と拓本が掲載されている。

藤崎遺跡第3地点出土土器 遺物カードに「早良区西新町刑務所内」発見と記載されている完形の甕と壺であり(写真3-7・8)、北部九州の弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器様式として現在も用いられる「西新(町)式」(杉原 1960, 森 1966)の標識資料となった学史的にきわめて重要な資料である。『彌生式土器聚成図録』に実測図が掲載されているほか(森本・小林編 1938:T185, T189)、北九州市埋蔵文化財調査会(1976)、常松(1982)でも実測図が公表されている。発見地の「刑務所」は、福岡市早良区にかつて所在した福岡刑務所のことであり、刑務所長の江藤惣六から寄贈を受けたことがカードから確認できる。現在では藤崎遺跡第3地点と呼ばれているため、ここではそれに倣った。なお、玉泉館資料には、上で述べた2点の他にも藤崎遺跡・西新町遺跡から採集された弥生土器が含まれており、詳細は宮井(1986)が報告している。

(3) 古墳時代

埴輪と須恵器が収蔵資料の中心である。発見地は現在知られる古墳や遺跡と照合できないものが多いが、福岡県東光寺剣塚古墳、丸隈山古墳、月岡古墳、日岡古墳、岩戸山古墳、石人山古墳、御所山古墳、大分県今泉横穴、山口県白鳥古墳、天王原古墳などを確認できる。また、馬具や玉類などの副葬品が収蔵されている古墳もあり、特筆すべきものとして以下が挙げられる。

福岡県岩戸山古墳出土資料 遺物カードに「八女郡長峰村(岩戸山)筑後国造磐井寿陵」と記載された資料であ



1



2



3



4



5



6



7



8

写真3 玉泉館旧蔵考古資料（弥生時代）〔写真は六本松図書館への移転時に撮影のもの，縮尺不同〕

り、円筒埴輪片2、須恵器（大甕破片1、器台1、高坏1）、土師器（壺1、器台1、ミニチュアの甕3・壺2・台付壺2・高坏1・提瓶1）がある（写真4-1～4）。これらは玉泉による採集品と大神宮神社からの寄贈品からなる。このほか、六本松図書館移転時のカードに「岩戸山？」と記載された須恵器（器台1）が存在する。岩戸山古墳は6世紀初にヤマト王権に対して反乱を起こした豪族磐井の墓の可能性が強く、1924（大正13）年8月にくびれ部に大神宮社殿が新築された際の工事で埴輪や多量の土器類、石人石馬片などが出土しており（福岡縣 1925）、玉泉館への資料の収蔵もこれと一連のものであった可能性がある⁴。なお、岩戸山古墳出土の須恵器を模倣したミニチュアの土師器に関しては、古賀（1959）で國學院大學所蔵品が紹介されている。

福岡県前畑古墳出土資料 玉泉が「草野町宮崎邸内装飾古墳」として報告した装飾古墳で、耳環、鉄鏃、刀子、小札甲、馬具、須恵器が出土したとされる（玉泉 1931a）。現在玉泉館資料として収蔵されている資料で遺物カードに「三井郡草野町大字紅桃林 宮崎準一邸内古墳出土」と記載されたものは鬼塚貞治寄贈の鉄鏃1点のみだが⁵（写真4-5）、今回の再整理の結果、「浮羽郡水繩村石垣中原」（平平蔵寄贈）と記載された雲珠、杏葉のなかに、玉泉（1931a）の写真図版に掲載された資料に対応するとみられるものを確認した（写真4-6・7）。「浮羽郡水繩村石垣中原」発見資料には鉄鏃等も存在し、玉泉（1931a）の写真図版との照合は難しいが、前畑古墳出土品が含まれている可能性もある。

(4) 古代

瓦が資料の中心を占め、中山と玉泉により採集されたものが多数みられる。発見地としては、福岡県内では城ノ原廃寺、斜ヶ浦瓦窯跡、筑紫館（鴻臚館跡）、三宅廃寺、筑紫郡二日市塔原（塔原廃寺か）、四王寺跡、般若寺跡、筑前国分寺、都府楼（大宰府政庁跡）、観世音寺、宗像郡神興村（神興廃寺か）、田川郡勾金村大字中津原鎮西原（天台寺跡か）、豊前国分寺、普門院、長安寺跡、筑後国分寺、怡土城などがある。福岡県外では、佐賀県基肄城、鹿児島県薩摩国分寺、京都府丹波国分寺、奈良県法隆寺、三重県伊勢国分寺、東京都武蔵国分寺、宮城県陸奥国分寺などの地名を確認できる。特筆すべきものとしては以下が挙げられる。

奈良県牽牛子塚古墳出土夾紵棺 遺物カードに「大和高市郡坂合村大字越」発見、松本善一寄贈と記載された夾紵棺の破片1点である（写真4-8）。牽牛子塚古墳は奈良県明日香村に所在する終末期古墳で、1914年の阪合村役場による調査や1977年の関西大学考古学研究室による調査などを通じ、石室及び墳丘周辺から2棺分の夾紵棺の破片が発見されている（高市郡役所 1915、網干編 1977）。これらの破片は現在いくつかの機関や個人に所蔵されており（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1979、植田・福庭 2009）、玉泉館資料のものはそのうちのひとつとなる。なお、牽牛子塚古墳は巨大な割り抜き式横口式石槨と夾紵棺を有すことから斉明天皇陵に当てる説があったが、2010年の明日香村教育委員会の調査で7世紀後半の天皇陵の墳形である八角形墳と判明し、『日本書紀』が陵前に葬ったと記す大田皇女の墓とみられる越塚御門古墳が発見されたことから（西光編 2013）、斉明陵説がさらに有力となった。

三宅廃寺出土資料 遺物カードに「筑紫郡三宅村三宅寺跡」「筑紫郡三宅村瓦窯址」と記載されている資料で、瓦、須恵器、土師器があり、その多くが三宅村役場と鏡山鉄雄の寄贈によるものである。玉泉は昭和7～8年に当遺跡を調査して『福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』第8輯に報告しており（玉泉 1933）、図版第四・第五に掲載の老司式軒丸瓦・軒平瓦、土師器碗に対応するものを玉泉館資料の中に確認することができる（写真5-1・2）。三宅周辺は那津官家の候補地と考えられたことがあり、玉泉は官衙の後に設けられた寺院と推定したが、那珂川中流域を本貫とする氏族の氏寺的な寺院とみられる。

城ノ原廃寺出土資料 遺物カードに「福岡市大字壱岐城ノ原鐘撞堂」と記載されている資料で、瓦、磚、石鍋片がある。資料の寄贈者は鏡山猛と「考古学研究会」となっている。玉泉は当遺跡を『福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』第6輯に報告しており（玉泉 1931b）、玉泉館資料のなかに、写真図版に掲載された軒丸瓦・軒平瓦の一部を確認することができる（写真5-3・4）。これらの軒瓦の文様は老司式の流れを汲むが、その変化のありかたからみて老司Ⅱ式より確実に新しく、寺院の創建は奈良時代後半と考えられている（比嘉 2016）。この廃寺の遺跡は戦後の開発で正確な位置が不明となっている。

鴻臚館出土資料 遺物カードに「(福岡城内) 筑紫館」と記載された瓦と磚が収蔵されている。大宰府鴻臚館の位

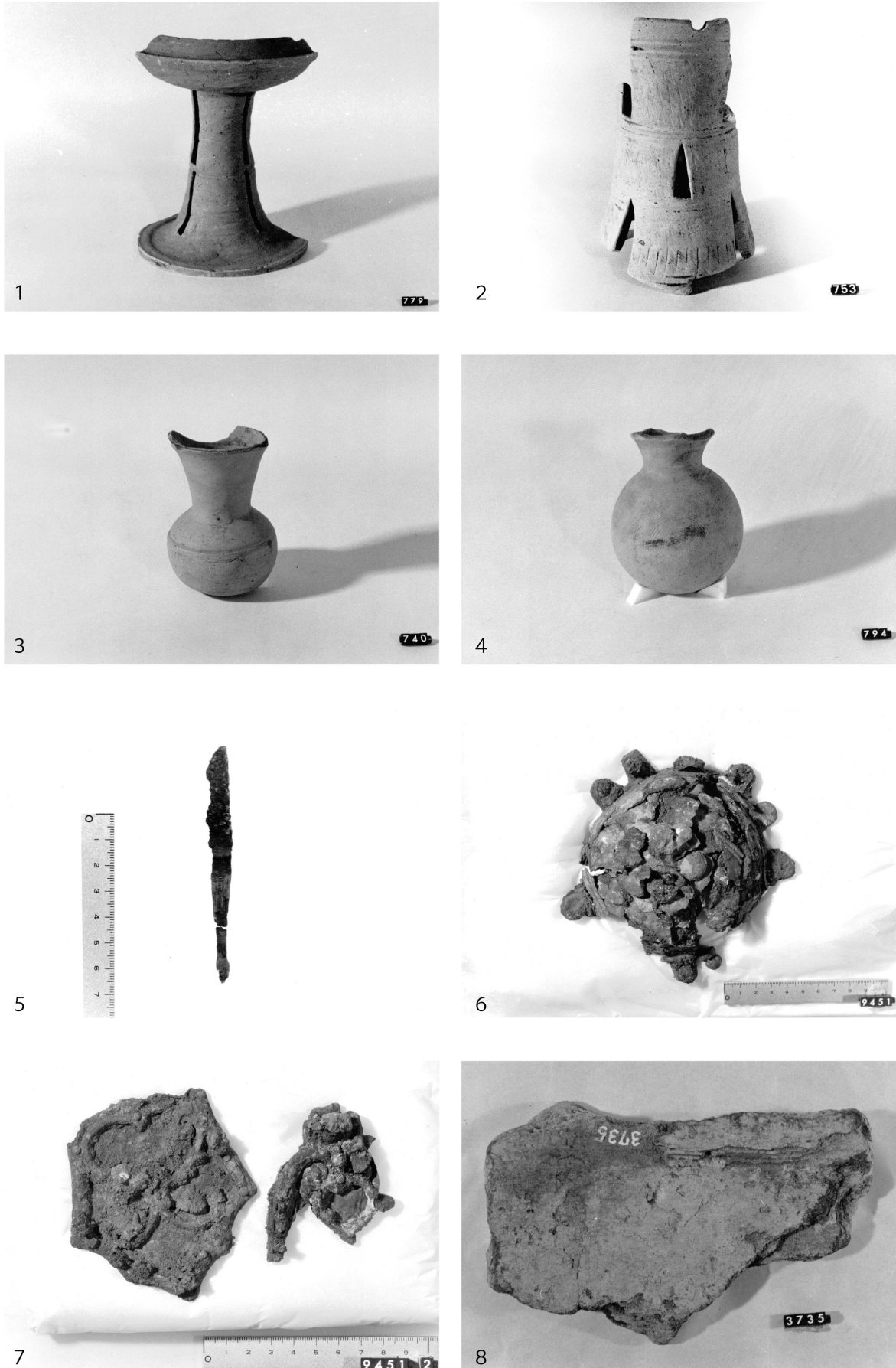


写真4 玉泉館旧蔵考古資料（古墳時代・古代）〔写真は六本松図書館への移転時に撮影のもの、縮尺不同〕

置が現在の福岡城内であることを明らかにしたのは中山平次郎の大きな業績の一つであるが(中山 1926-7), 玉泉館資料には玉泉や当時の学生の採集による資料が多数収蔵されており, 中山(1926-7)が第五図・第六図で玉泉発見品として紹介した軒丸瓦・軒平瓦も確認することができる(写真5-5・6)。なお, 当館所蔵の故岡部養逸氏旧蔵資料にも中山採集の当遺跡出土軒瓦が含まれる(岩永 2008)。

飯盛山出土瓦経 福岡市西区の飯盛山山頂から瓦経片が出土することは江戸時代から知られていたが, 1924年7月に雨請の祭壇を作る際に計3回の発掘が行われて埋納された瓦経の大多数が回収された(ST 1924, 福岡縣編 1926)。また, 永久二(1114)年銘を持つ願文を刻んだ瓦板片も回収されており, 造営の年代や経緯がわかる瓦経として貴重な事例である。1924年に出土した瓦経は現在いくつかの機関や個人に所蔵されているが(八尋 1982), 玉泉館資料には斉藤義から寄贈された3点が存在する(写真5-7~9)。これらは法華経巻第七の一部1点(八尋 1982の復元割付の7-8)仁王経巻上の一部2点(八尋 1982の復元割付の上-17・18)にあたる。なお, 本資料は他機関所蔵の資料とともに2012年3月に福岡市有形文化財に指定された(岩永 2012)。

(5) 中世・近世

遺跡出土資料としては, 城郭から出土した瓦類(福岡県高祖城, 名島城, 福岡城, 佐賀県名護屋城など), 陶磁器類とその生産関連資料(博多港底, 福岡県唐原焼窯跡, 佐賀県物原窯跡, 鏗谷窯跡出土品など), 福岡城出土の焼塩壺などが認められる。このほか, 主に寄贈品や購入品からなる様々な資料が含まれており, 和鏡, 十手, 刀装具, 武具, 馬具などが存在する。特筆すべき資料としては以下が挙げられる。

博多港出土中国陶磁器 遺物カードに「博多港底」と記載された中山平次郎の寄贈による資料である。出土から収蔵までの経緯は不明だが, 「古代の博多」には博多港浚渫の際に多数の白磁・青磁が出土したことが言及されており(中山 1926-7), その関連資料の可能性もある。「古代を掘る」展(朝日新聞西部本社編 1978)や, 開学記念貴重文物展観(九州大学附属図書館中央図書館 1997)などの展示で紹介されており, 破片も含めて14点が存在する⁶。龍泉窯系の青磁碗を中心とするが(写真6-1・2),

龍泉窯系平底皿, 同安窯系の碗・皿, 白磁碗の底部破片も含まれる。博多遺跡群での貿易陶磁の出土傾向(田中 2008)を参考にすると, 12世紀後半~13世紀前半頃の資料と考えられる。

旧博多駅前出土備蓄銭 1957年に旧博多駅前のナショナルビル横東隣電報局前の道路改修中, 6~7000枚の中国古銭が収められた「甕」が発見され, 西福岡警察署, 福岡県教育委員会を経て玉泉館に納入された(津田 1960)。現在玉泉館資料として収蔵されている銭の合計枚数は3883枚とされており, 銭種構成からは15世紀後半~16世紀前半に位置付けられるが(桜木 1992), 銭の納められた容器は備前焼V期(間壁 1991)の壺であることから, 16世紀中頃以降の埋納と考えられている(小畑 1999)(写真6-3・4)。

福岡城出土資料 遺物カードに「福岡市城内練兵場」もしくは「福岡城御殿址」と記載された資料で, 大羽辰雄からの寄贈品を中心とするが, 玉泉の採集品, 鏡山猛からの寄贈品, 国学者の江藤正澄[1836-1911]三男である江藤廣三郎からの寄贈品も存在する。資料の主体となるのは焼塩壺で, 「泉湊伊織」「泉州麻生」の刻印をもつものもある(写真6-5)。このほか, 鯨瓦2点(写真6-7・8), 鬼瓦1点(写真6-6), 鬼瓦もしくは獅子口の一部1点が存在し, 鯨瓦のうち1点には「安政七年 ハカタ 瓦師」の銘が刻まれている。

(6) その他

以上のほかに, 日本国外の資料も多数収蔵されている。最も多いのは朝鮮半島のもので, 中国, 台湾がそれに次ぐ。内容としては, 磨製石器, 土器, 瓦類などが多いが, 中国唐代の陶俑や, 朝鮮李朝の銅活字なども含まれている。このほか, アフリカ・カルタゴ出土の土器と貨幣, 台湾やスマトラで収集された民族資料なども存在する。また, 古今東西の貨幣と紙幣のコレクションも存在するが, その寄贈者には旧制福岡高等学校関係者の名前を多く確認することができ, 資料の収集過程を窺うことができる。

5. 近年の資料活用状況

玉泉館資料は総合研究博物館が収蔵する考古資料にお

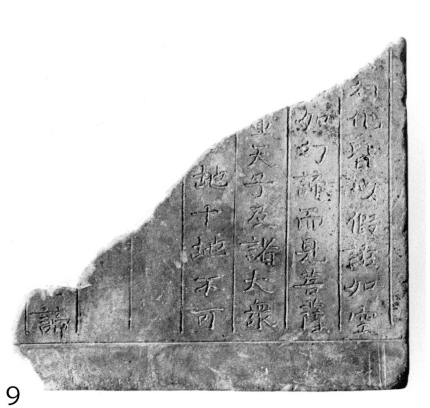
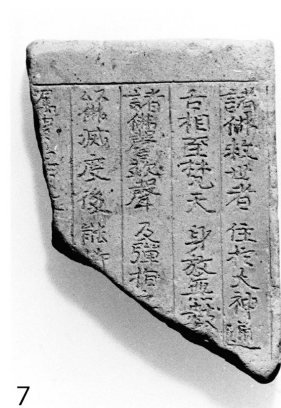


写真5 玉泉館旧蔵考古資料（古代）〔写真は六本松図書館への移転時に撮影のもの、縮尺不同〕



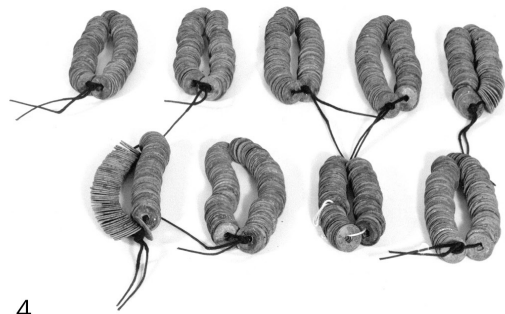
1



2



3



4

9473



5



6



7



8

写真6 玉泉館旧蔵考古資料（中世・近世）〔写真は六本松図書館への移転時に撮影のもの、縮尺不同〕

いて大きなボリュームを占めており、様々な展示や教育普及活動に活用されてきた。具体的には、2005年に旧工学部本館に開設された常設展示室で中山平次郎採集今山系石斧未成品などを紹介してきた。また、2018年度には、笹丘小学校で出張展示も行っている。

再整理作業の進んだ2017年11月～2018年3月には、記録資料館、九州文化史資料部門、法学研究院と共催で、箱崎地区中央図書館エントランス常設展示コーナーにて玉泉館資料の展示を行った（米元ほか 2018）。博物館からは、江戸時代の鏡、鐔、十手、藩札や、近代の軍票などを出品し、江藤正澄旧蔵の福岡城出土鯨瓦が話題を呼んだ（『西日本新聞』2018.3.25）。

また、2019年11月には、公開展示「博物の森へようこそ」に合わせて旧工学部本館廊下に新設した展示コーナーを利用し、旧工学部本館廊下にて本コレクションの来歴と主要資料を紹介する特別展示「よりぬき玉泉館」を行った。具体的な展示資料としては、中山平次郎関係弥生時代資料、福岡県岩戸山古墳出土資料、福岡県飯盛山出土瓦経、旧博多駅前出土備蓄銭、江戸時代の鏡をピックアップした。

2020年3月以降は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため博物館は臨時休館することとなったが、オンラインでの展示活動に取り組んでいる。9月に開催された附属図書館・総合研究博物館・大学文書館の3館連携による電子展示「九州大学のコレクション：大学創設期のアジア学術交流と古地図」では、本コレクションから博多港底出土中国陶磁を出品した⁷。

また、2021年1月には九州大学総合研究博物館データベースが公開され、本コレクションの内容もオンラインで閲覧できるようになった⁸。

おわりに

以上、玉泉館資料について、近年の再整理結果をふまえたうえでコレクションの全体を概観してきた。これらの資料は、学史的に重要なものを含むだけでなく、行政発掘のシステムが確立する以前の考古学者の活動を知ることのできる資料としても貴重なものである。また、本稿の準備過程で、これらの資料は玉泉館に収蔵後も多くの研究者に利用され再報告されてきたことを改めて確認

することができた。今後もこれらの資料が活用され続けることを願って結びとしたい。

謝辞

米元史織氏を中心に行われた2015～2017年の玉泉館資料の再整理なくしては、本稿をなすことは不可能であった。この作業に関わったすべての皆様にここでお礼申し上げます。

注

- 1 玉泉館資料には考古資料の他に多数の古文書も存在したが、これらは現在記録資料館に収蔵されている。
- 2 2000年に九州大学大学院比較社会文化研究院に改称した。
- 3 「考古学研究会」は、旧制福岡高等学校第三回卒業生の中野国雄、橋本洋、第四回卒業生の齋藤金弥により設立された（玉泉 1972）。
- 4 玉泉採集品の発見年月日は「大正13年11月29日」と記載されている。
- 5 このほか、関連する可能性のある資料として遺物カードに「筑後国三井郡草野町大字紅桃林 宮崎益太郎邸南古墳トッタン」と記載された青磁が1点ある。
- 6 このほかに、番号の注記とカードがないが博多港底出土品とともに展示されていたもの1点、カードに「博多港？」と記載されたもの1点がある。
- 7 本展示は現在も附属図書館のウェブサイトで閲覧できる（<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/exhibition/asiaweek2020>）。
- 8 九州大学総合研究博物館データベース（<http://db.museum.kyushu-u.ac.jp/jp/>）

参考文献

- 朝日新聞西部本社（1978）古代を掘る：博多の地下2000年。朝日新聞社。
- 網干善教 編（1977）史跡牽牛子塚古墳。明日香村教育委員会、明日香。
- 岩永省三（2008）故岡部養逸氏旧蔵中山平次郎先生関係資料概要報告。九州大学総合研究博物館研究報告6，107-125。
- 岩永省三（2012）飯盛山瓦経、福岡市指定文化財となる！。九州大学総合研究博物館ニュース18，2。
- 岩永省三・米村和紘・小山内康人・田中良之（2011）弥生時代青銅器研究における今次分析成果の意義。考古学と地球科学—融合研究の最前線—：九州考古学会・日本地質学会西日本支部合同学会。pp.23-24。九州考古学会・日本地質学会西日本支部，福岡。
- 植田兼司・福庭万里子（2009）牽牛子塚古墳の夾紵棺片：植田

- 兼司氏採集遺物. 関西大学博物館紀要15, 1-15.
- 小畑弘己 (1999) 博多駅前出土銭の再検討. 博多研究会誌 (法
哈噠) 8, 84-94.
- 北九州市埋蔵文化財調査会 (1976) 福岡県北九州市小倉南区・
高島遺跡. 古文化談叢 3, 1-70.
- 九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座 (1996) 九州
大学旧玉泉館収蔵考古資料 (1): 九州縄文時代資料 (1).
九州文化史研究所紀要40, 1-86.
- 九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座 (1997) 九州
大学旧玉泉館収蔵考古資料 (2): 九州石器資料 (1). 九州
文化史研究所紀要40, 1-86.
- 九州大学附属図書館中央図書館 (1997) 開学記念貴重文物展観.
大学広報868, 11-20.
- 古賀寿 (1959) 筑後八女市岩戸山古墳の祭祀用土器. 九州考古
学7・8, 4-5.
- 小林茂 (1988) 教養部玉泉館資料の移転について. 九大教養部
報93, 8-12.
- 桜木晋一 (1992) 博多遺跡群出土銭貨 (1). 法哈噠 1, 84-94.
- 島田貞彦 (1930) 筑前須玖史前時代遺跡の研究: 京都帝国大学
文学部考古学研究報告第11冊. 刀江書院, 京都.
- 設楽博己・佐々木由香・國木田大・米田穰・山崎孔平・大森貴
之 (2015) 福岡県八女市岩崎出土の炭化米. 東京大学考古
学研究室研究紀要29, 147-156.
- 杉原荘介 (1960) 農業の発生と文化の変革. 世界考古学体系 2
(杉原荘介編). pp.1-13. 平凡社, 東京.
- 高市郡役所 (1915) 奈良縣高市郡志料. 高市郡役所, 高市.
- 高倉洋彰 (1972) 弥生時代小形仿製鏡について. 考古学雑誌58
(3), 1-30.
- 高倉洋彰 (1979) 筑紫野市永岡西方台地遺跡出土の弥生土器.
古文化談叢 6, 53-61
- 田尻義了・足立達朗・渡辺芳久・石田智子・小山内康人・田中
良之 (2013) 地球科学の高精度分析に基づくいわゆる今山
系石斧と今山玄武岩の対比. 平成25年九州考古学会発表資
料集. pp.96-97. 九州考古学会, 福岡.
- 田中克子 (2008) 中国陶磁器. 中世都市博多を掘る (大庭康時・
佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編). pp.112-128. 海鳥社,
福岡.
- 玉泉大梁 (1931a) 草野町宮崎邸内装飾古墳. 史蹟名勝天然記念
物調査報告書 第6輯 (福岡縣編). pp.29-33. 福岡縣, 福
岡.
- 玉泉大梁 (1931b) 杵岐村城ノ原廢寺址. 史蹟名勝天然記念物調
査報告書 第6輯 (福岡縣編). pp.61-65. 福岡縣, 福岡.
- 玉泉大梁 (1933) 筑紫郡三宅廢寺址. 史蹟名勝天然記念物調査
報告書 第8輯 (福岡縣編). pp.27-35. 福岡縣, 福岡.
- 玉泉大梁 (1966) 玉泉館の記. 九大教養部報18, 3.
- 玉泉大梁 (1972) 玉泉館のこと. 青陵: 思い出の記 (青陵会
編). pp.6-11. 青陵会, 福岡.
- 津田繁二 (1960) 福岡県下の発掘古銭報告. 貨幣4 (4), 23-24.
- 常松幹雄 (1982) 遺跡の発見と研究. 西新町遺跡: 福岡市埋蔵
文化財調査報告書第79集. pp.18-20. 福岡県教育委員会, 福
岡.
- 中山平次郎 (1916) 筑前國糸島郡今津の貝塚. 考古学雑誌6 (6),
25-32.
- 中山平次郎 (1917) 九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間
の遺物に就て (一) ~ (四). 考古学雑誌7 (10・11)・8
(1・2), 1-38, 1-34, 16-41, 15-47.
- 中山平次郎 (1920) 大甕を発見せる古代遺跡 (二). 考古学雑誌
11 (2), 65-81.
- 中山平次郎 (1923) 焼米を出土せる竪穴址. 考古学雑誌17 (1),
11-21.
- 中山平次郎 (1924) 筑前國糸島郡今山に於る石斧製造所址. 考
古学雑誌14 (14), 39-52.
- 中山平次郎 (1925a) 筑前國糸島郡今山に於る石斧製造所址
(下). 考古学雑誌15 (1), 13-26.
- 中山平次郎 (1925b) 筑前朝倉郡福田村平塚字栗山新発掘の甕棺
内遺物. 考古学雑誌15 (4), 1-29.
- 中山平次郎 (1926-7) 古代の博多 (一) ~ (八). 考古学雑誌16
(6・7・9・11)・17 (1・3・4・10). (岡崎敬 校訂, 1984.
古代乃博多. 九州大学出版会, 福岡. 所収)
- 中山平次郎 (1928) 魏志倭人傳の『生口』. 考古学雑誌 18 (9),
1-18.
- 中山平次郎 (1931) 今山の石斧製造所址. 福岡県史蹟名勝天然
記念物調査報告書 第6輯. pp.67-82. 福岡県, 福岡.
- 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 (1979) 飛鳥時代の古墳: 飛
鳥資料館図録 第6冊. 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館,
明日香.
- 西尾陽太郎 (1968) 玉泉館: 九大教養部歴史資料展示室. 図書館
情報4 (11), 57-58.
- 西光慎治編 (2013) 牽牛子塚古墳発掘調査報告書: 明日香村文
化財調査報告書第10集. 明日香村教育委員会, 明日香.
- 比嘉えりか (2016) 城ノ原廢寺. 新修福岡市史 資料編考古1
(福岡市史編集委員会編). pp.630-635. 福岡市, 福岡.
- 秀村選三 (1966) 玉泉大梁先生のこと. 青陵: 思い出の記 (青
陵会編). pp.152-157. 青陵会, 福岡.
- 秀村選三 (2017) 戦中派学生から日本社会経済史研究への道.
経済史研究20, 133-160.
- 福岡縣 (1925) 史蹟名勝天然記念物調査報告書 第1輯. 福岡
縣, 福岡.
- 福岡縣 (1926) 史蹟名勝天然記念物調査報告書 第2輯. 福岡
縣, 福岡.
- 間壁忠彦 (1991) 備前焼: 考古学ライブラリー60. ニュー・サ
イエンス社, 東京.
- 宮井善郎 (1986) 九州大学文学部考古学研究室, 九州大学教養
部玉泉館収蔵の藤崎・西新町遺跡周辺の遺物. 藤崎遺跡Ⅲ:
福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集 (井沢洋一・谷沢仁
編). pp.100-112. 福岡市教育委員会, 福岡.
- 宮本一夫 (2015) 中山平次郎採集今津貝塚資料. 市史研究ふく
おか15, 74-81.
- 森貞次郎 (1966) 九州. 日本の考古学Ⅲ 弥生時代 (和島誠一
編). pp.32-80. 河出書房新社, 東京.
- 森本六爾・小林行雄編 (1938) 弥生式土器聚成図録. 東京考古
学会, 大阪.

八尋和泉(1982)筑前飯盛山瓦経(前篇).九州歴史資料館研究
論集8, 33-116.

山根泰志(2011)旧制福岡高等学校蔵書.九州大学附属図書館
研究開発室年報 2010/2011, 32-41.

米元史織・梶嶋政司・和仁かや・岩永省三(2018)玉泉大梁先
生の集めた玉泉館資料.九州大学総合研究博物館ニュース

29, 4.

ST(1924)最近筑前飯盛山頂出土の経瓦と経塚に就いて.筑紫
史談33, 40-46.

Received December 28, 2020; accepted January 10, 2021